
とある冒険～星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ～

ダイヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある冒険～星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ～

【Zコード】

Z3750Z

【作者名】

ダイヤ

【あらすじ】

ある世界でソニックがいつものように仲間達とそこら辺を走っていたらいきなり目の前に謎の穴が現れて皆を吸い込んでしまったソニックが目を覚ますと謎の世界が広がっていた そして目の前には謎の女の子がそしてソニックは仲間を探すためその女の子と新たな冒険を始めるがその女の子にはある秘密がー！？
ソニックシリーズ大冒険！

プロローグ（前書き）

一回書いてみたかった冒険小説 良ければ見てください！

プロローグ

自分という物がある感触はある

周りにあるのは 間 何処を見回してもすべて黒一色で他には何もない

自分は誰？

ハジメテル。

でも

自分の顔も 男なのかも女なのかもすべて

わからない

自分は誰？

自分は何者？自分は誰？

すべてがわからない

「どうしてこんなにもなにもかもがわからないのに自分がいるとわかるのか？」

どんなに考えても考え方られない

まるで

考えるなと言われるよ(つこ)

体も動かない 考える事も出来ない ここが何処なのかも
誰なのか全て 自分が

分からぬ

でもなんで自分がいるとわかる?それもわからない

わかるのは 間

自分という存在

他には

何も

わからない

ここは謎の 間

とある 間

そして何処からか声が聞こえた

「お前は……だ……の……なんだ……奇跡の……だ……」

なぜか意識が朦朧としてとじるがかかるれて聞こえない

「だそ……必ず……だそ……そして……必ず……必
ず……」

何を伝えたい？何を言いたい？

何かが見えてきた

光だ

また声が聞こえてきた

「これからお前は……」

全部聞を取る前に光は自分を包みこんだ

そして

世界が変わった

闇から

光に

ここから

全てが始まる

プロローグ（後書き）

感想まとめ（つづかねこ）

始まり（前書き）

この小説はソニックとオリジナルキャラの女の子が主役です

始まり

「」とある草原そこには青い針鼠との仲間達がいた

ソニック「今日もいい天気だなー！」

テイルス「そうだねソニック」

ソニックの言葉に返事を返す2本の尻尾を持つ狐マイルス・パウワーリーとテイルス ソニックの相棒だ

ソニック「のんびり過ごすのもいいが最近暇だぜ」

テイルス「平和も良いことだよ確かに最近ひまだけど

「」

そう言ってソニックをテートに誘うパンクの針鼠Hリー・ローズ
ソニックが大好きな女の子だ

ソーシャル断る術

そう言つて逃げるソーック

「まわなーいー！」

ヒーラーもお馴染みのペラペラハンマーを取り出しへンーックを追いかける

テイルス「やれやれ……」

テイルスも呆れながら二人を追い掛ける

ソーック「ここまで来れば安心だろ……ん？」

逃げてるソニックが見つけたのは白い穴 分かりやすくいうと小さめのブラックホールの白い版

ソニック「なんだこれ…」

ソニックがその穴を見ていると…

Hリー「なに見てるの？」

テイルス「どうしたの？」

自分に追い付いた二人がいた

ソニック「Hey! 一人共あれ見てくれ」

ソニックはそう言ってさつきの穴を指差す

Hリー「何あれ？」

テイルス「穴…？」

ソニック「今見つけたんだ」

3人がそう言って穴を見ていると…

「ゴオオオオオー！」

ソニック「！？」

いきなり穴が大きくなつて周りの物を吸い込み始めた

ソニック「な、なんだ！？」

テイルス「うわわーー！」

「ハハハー」「キャーー！」

そして穴は完全に広がりソニック達を吸い込んで穴は消えた

ソニック「う……！」は……？」

ソニックが目を覚ますとそこはまたいつもまでの違い
花が咲いている原っぱにいた
色とりどりの

ソニック「ここは何処だ！？テイルス達は？」

仲間が居ない事に気付くソニック

ソニック「はぐれたか…探しにいくか」

やつらひで原っぱを駆け抜けるソニック

ソニックが仲間を探しているとある一人の女の子が倒れていた

ソニック「お、おい大丈夫か？」

？？？「…うう

女の子は田を覚ましてソニックを見た

？？？「助けてくれたのか？」

ソニック「いや、倒れていたんだ、大丈夫か？」

？？？「ああ、平氣だ」

その女の子の見た目と格好は見た田は紫色の針鼠でなぜか黒い羽根
があり黒いワンピースを着ていて黒いブーツをはいでいる

ソニック「なんでこんな所で倒れていたんだ？」

？？？「えつと…」

その女の子は思い出している

????「わからない…」

ソニック「へ？」

????「確かに何故か走っていて疲れて氣を失ったんだ」

アバウトな説明にソニックも困っている

20

ソニック「まあ…仕方ないか…俺はソニックザヘッジホッグだ宣しくなーーお前は？」

????「自分は…」

そつぱりて自分の名前を言わないとあるが…

????「…わからない」

ソニック「…え? まさかお前…」

？？？「記憶がない……なにもかも……何も思い出せない……」

ソニック「なんて事だ……」

ソニックとその女の子はその場に立つたままだった……

続く

始まり（後書き）

感想待つてまーす

記憶のない少女

ソニック「記憶がないなんてな……」

「すいません」

ソニック「いや、ここ

「…」

ソニック「じゃあ、これからは呪をつけよう」

「何処かいくのか?」

ソニック「仲間を探すのを

「仲間を?」

ソニック「あ

ソニックせりふコードをせらわた由い六の事を話した

????「へえ……」

ソニック「じゃあな

????「あ……あの……」

ソニック「?

????「俺もついていくっていいか?」

ソニック「へ? (こいつ俺系なんだ) 」

????「お前には助けて貰つたし……お前の仲間を探してれば記憶が
戻るかもだし……」

ソニック「別にいいぜ、でもお前をなんと呼べばいい?」

????「ん~……」

考える彼女を見てソニックは

ソニック「リングでどうだ？」

？？？「は？」

ソニックの発言に田丸を丸くする

ソニック「手首にリングが付いてるしさ」

？？？「…」

彼女が手首を見ると確かに銀色のリングがついていた

ソニック「どうだ？」

？？？「いいぞ」

ソニック「よしーじゃあ宜しくなリングーー。」

リング「あー」

二人は握手をして仲間を探すそしてリングの記憶を探すための旅に出るしかしこれからソニック達が凄い冒険をするなんて誰も知るよしもなかつた…

？？？「あいつを見つけた…至急作戦を実行する…」

木の上で誰かが無線機を使って話している

？？？「ああ…わかつてゐまた連絡する
「

ぴ
っ

通信を切つた音がした

? ? ? 「 … まづは様子を見とくか
」

謎の人物はソニックとリングを見つめていた…

記憶のない少女（後書き）

一応今のところのリングのプロフィールです

名前	リング（仮）
年齢	不明
性別	女
身長	105?
体重	秘密
一人称	俺

かなり男っぽい性格 ソニック同様挑戦的

これは今のところのリングのプロフィールです

クリスタル村と…（前書き）

今回は新たなるオリジキャラがでます

クリスタル村と…

ソニックとリングは仲間を探すために走っていたリングは走りはそこまで速くないが飛ぶとソニック並の速さになる

ソニック「お前は飛ぶとはやいな」

リング「ああ 何故かな」

そんなこんなで…

クリスタル村オリジナル

ソニック「綺麗な村だな」

リング「ああ」

テイルス「ソニック！！」

ソニック「テイルス！！」

なんとクリスタル村にテイルスがいた

テイルス「誰?」

リングを見て不思議に思いつテイルス

ソニック「こいつは…」

ソニックは説明をした

テイルス「へえ…」

ソニック「どうで此処が何処かわかるか?あの白い穴の事も…」

テイルス「実はまだわからないんだよ…でもこりは異世界って言つことはできるよ」

ソニック「そりか…」

テイルス「僕はもう少しここで調べとべからせじら辺を走っていたら…エミーもこいつにこるだらうし…」

ソニック「そりあるか… リングは哪儿にある?」

リング「ソニックにつれて…」

ソニック「じゃ あ頼むぜテイルス」

テイルス「うん!—」

そしてソニックとリングは走っていった

ソニック「こゝは…」

リング「…」

ソニック達は今森の前にいた

ソニック「いくとするか」

リング「…」

リングも頷いて森に入っていく

30分後

ソニックとリングは森の一番奥で休んでいた

ソニック「ふ…どうだなんか思い出せそうか?」

リング「…」

リングは黙つて首を横にふった

????「見つけたぞ!」

ソニック リング 「！？」

そう言ってソニック達の前に現れたのはカラスの男（ジエットの黒い版だと思ってください）

ソニック「誰だ？」

？？？「名乗る必要なんかない」

ソニック「リングの知り合いか？」

リング「知らない」

？？？「リングが名前か」

リング「いいや、これは仮の名前だ」

？？？「記憶がないのか」

リング「そりだが」

ソニック「そんなことよりお前の目的はなんなんだ?俺達になんか
よつか?」

? ? ? 「おっと、確かにあんまり無駄話してる場合じゃなかつたな
俺はお前ではなくお前に用があるんだ」

そう言ってリングを見る

リング「…」

ソニック「リングを知ってるのか?」

? ? ? 「詳しくは知らないがな」

リング「俺になんの用があるんだ」

? ? ? 「…」

リングが聞くと男は自分の背中にある銃を取り出して銃口を一人に

向けて言つた

「あの方の命令によつてリングー！貴様を捕らえる！」

クリスタル村と...（後書き）

感想待つてます

じめる画事企業（前書き）

今日は? ? ? の事が少しわかります

のある軍事企業

ソニック達は？？？の言葉にびっくりしていた

リング「俺を捕らえるーー？」

ソニック「どういふ意味だよお前ーー？」

？？？「そのままの意味だ俺はリングを捕らえに来たそれでいいだ
う。」

ソニック「よくねえよーどうしてリングを狙つ？」

？？？「お前わからないのか？そいつの価値を

ソニック「まあ？」

？？？「ふん」

リング「人をまるでもの扱いして……名前も名乗らず失礼な奴だ

？？？「まあそうだな……じゃあ教えてやるよ俺はブラック、ブラック

ク・クロウだ」

ブラック・クロウと名乗る男そして一人に銃をむけるしかし一人が
ここであつたり諦めるわけがない

ブラック「あの時はぬかつたがもうあんなミスはしない！」

ソニック「あの時？」

ブラック「言つ必要ない」

ソニック「…」

ブラック「…」

ソニック「今だ！！」

ソニックが一瞬の隙をついてロングを抱えて逃げ出した

リング「うわー？」

ブラック「ー待て！」

隙をつかれて必死に追い掛けながら銃を撃つブラックしかソニックはそんなの慣れっこだ銃のたまを避けていく

ブラック「ちつー！」

ソニックの速さに敵わず差をつけられる

ブラック「ちつ…まあいいまだまだチャンスはたくさんある」

諦めるブラックと逃げ続けるソニック

森の入り口前

ソニック「ここまで来れば安心だな…」

リング「どうあえず下ろしてくれ…」

ソニックにお姫様だつ」それ顔を赤くしていのリング

ソニック「ああ

リング「ふう……

ソニック「それよりあこつは何なんだーー？」

リング「わからない……

ソニック達が悩んでいると……

「…」「わかった心つかつたのか？」

ソニック リング 「…？」

そこには先程引き離したブラック・クロウがいた

ソニック「な 何故！？」

ブラック「こんな森で引き離したとしても逃げそうな場所位わかる」

ソニック「なるほど…」

リング「お前は一体何者なんだ？ビハビして俺を捕りやる…？」

ブラック「俺はとある軍事企業のブラックスターーズの幹部だ」

ソニック リング「軍事企業…？」

ブラック「リングはそのボスからの命令で捕まえないと言われている邪魔をするなら消えてもらいつ」

ソニック「へん…やれるものならやつてみなー…」

リング「おこー！こは流石に危険だ…相手は銃があるのこー…」

ソニック「…」

確かにと考えるソニック

ブラック「なら本当に消えてもいいつー。」

銃を構えるブラック

ソニック絶対絶命の大ピンチ！！

ある軍事企業（後書き）

パラダイスの方更新したいけどネタが…

滅びた村と影の謎（福井県）

ヒーリングが叶う一

ブラック「覚悟はできてるか？」

ソニック「…」

ソニックはなんとかならないかと考えているその時足下にあるものがあつたそれを見てそれを見てソニックは笑みを浮かべる

ブラック「死ね！！」

ブラックが銃の引き金をひくとソニックはリングの肩をつかみ…

ソニック「カオスコントロールー！」

しゃばんー！

ソニックとリングは光に包まれて消えた

ブラック「な…！？」

ソニックは足下にカオスエメラルドだったのだ しかし何故カオスエメラルドがここ異世界にあるのか？ まあそこはおいといて：

しゅばあん！！

ソニック「ふう…危なかつた…」

リング「な…何なんだ今の！？」

ソニック「カオスエメラルドって言ひ奇跡の宝石を使ってワープしたのさ」

そう言つてリングに赤色のカオスエメラルドを見せる

リング「へえ…綺麗だな」

やはり女の子なのがカオスエメラルドに素直に反応した

ソニック「やあこやじつねに来たまつたやど」何処だ?」

今ソニック達がいるのは周りは物が散乱していたり家などはもう瓦礫の山と言つてもいいだろうもつと分かりやすくてあとあの白銀の針鼠の住んでいる世界の一部と言つてもいいだう

リング「廃墟…?」

ソニック「滅びた村なのか…?」

ふとソニックが横を見ると看板があつたそこには：

滅び村

…と書いてあつた

ソニック リング「… そのまんまかよー」の村の名前…」

あまりにもそのままなので思わずリングまでもが突っ込んでしまつた

ソーシャク「こゝは滅びるためにある村か！？」

リング「…ん？」

ソーシャク「どうした？」

リング「あそこから煙が…」

リングが指差す先には確かに煙があがっていた

ソーシャク「行くか」

リング「ああ」

二人は瓦礫の山をジャンプしながら煙があがっているところにむかつた

ソニック「これは…」

リング「…」

煙があがっている周りには謎の影みたいに黒くてバイオハザードででくるような犬がいたしかもたくさん（変な例えですいません）

ソニック「こいつらは何なんだ？」

リング「わからない…だが嫌なオーラを感じる

犬「グギヤアアア！」

犬がいきなりリングに飛びかかってきた！

ソニック「リング！」

リング「はあーーー！」

ばしーー！

犬「ーー？」

なんとリング回し蹴りをして犬はその場に倒れた

ソニック「お前強いんだなーーー！」

リング「…いくぞ」

ソニック「ああーーー！」

二人は犬の大群に突っ込んで行つた

滅びた村と影の謎（後書き）

次回は……

超能力者と音速と

二人は今謎の影みたいな犬と戦っている一人とも強く勝機はあつたが簡単には行かなかつたなんせ相手は10匹以上いるうえ体もなかなか大きい二人の体力面が限界をつく前に何とかしたい医療品も持つていないので長期戦にも持ち込めない

ソニック「やつてもやつてもキリがないな！！」

リング「このままだと体力が…」

もう半分は倒したがまだ8匹いる

犬「シャアー！」

犬がいきなり後ろから二人に飛びかかってきた！

一人「や、ヤバイ…！」

二人は気付くももう手遅れだつたと思ったが…

？？？「はあ！！」

犬「！」

なんと犬がいきなり止まり後ろにいる犬の大群に突っ込んでいった
一人はびっくりしていたがお陰で犬は全滅

ソニック「な…」

リング「今のは一体…」

？？？「大丈夫か？」

ソニック「シルバー！？」

シルバー「ソニック！？」

そこにはシルバーだつた先程犬を止めたのも彼だ

シルバー「所でこいつは誰だ？」

ソーラー「うわー？」

ソーラーはまた全てを説明した

シルバー「なるほどな……」

ソーラー「所でお前達と一緒にいるんだから、

シルバー「お前達と一緒に未来で白い穴があつてそれに吸い込まれたんだ」

ソーラー「それでここにいると……」

シルバー「ああ

——
——
——
——
——
——

ソーラー「うわー？」

いきなりソニックの持つている通信機が鳴り出した（この間に持つてた！？）

テイルス「ソニック…」

ソニック「テイルス…」にか分かったのか？

テイルス「少しならね

ソニック「分かった今からそっちこいくへ

ハ

ソニック「行くか

リング「ああ

シルバー「どういへんだ？」

ソニック「テイルスの所をお前までいわるへ。」

シルバー「俺も此処が何処か知りたいしついてくぜ」

ソニック「よし行くぜ！」

ソニック達は再び走り出した

新たにシルバーを仲間に加えたソニック達

ここからが本当の始まりだ

超能力者と音速と（後書き）

本当はソニックとシルバーを戦わせたかつたけど、どう展開にすればいいかわからずカットしました

作りられた存在と世界（前書き）

今度はこの世界の事がわかります

作られた存在と世界

今ソニック達はテイルスのいるクリスタル村に向かっていた…

シルバー「へえリングって記憶がないのか」

リング「ああ」

シルバー「まあそのうち戻るさ」

リング「だといいな…」

ソニック「クリスタル村まであと少しか…」

クリスタル村

テイルス「ソニック…あれシルバーもいたの？」

シルバー「ああ」

ソニック「テイルス」は何処なんだ?」

テイルス「うん……調べてみたらここは創造と想像の世界……いわば作られた世界だよ」

ソニック「え……」

シルバー「え……」

二人「ええ――――――!」

ソニック「どういう意味だよテイルス?」

シルバー「もう少し分かりやすく言つてくれ」

テイルス「えっと……簡単にいうとなんか凄い力を持っている人がいてその力を使って自分の思ったような世界を想像してそして世界を作った……こんな感じかな」

ソニック「村の人達も家も木とかも全部作られたってのか?」

テイルス「うん……」

シルバー「そんなこと可能なのか?」

テイルス「どんな力かは知らないけど……」

リング「ま、まで!」

テイルス「なに? リング」

リング「作られた世界だと言つたよな?」

テイルス「うん」

リング「じゃあ俺もその力で作られた存在なのか!?」

ソニック シルバー テイルス「! !」

確かに最初にソニックが会つた時からこの世界にいたリングも例外ではないのかもしね

テイルス「それは…」

シルバー「でもリング記憶がないんだろ？俺達より早くこっちに来てその衝撃で氣を失つて記憶をなくしたかもしれない！」

テイルス「確かにそれもあるね」

ソニック「まずは記憶を探さないとな」

リング「あ…」

ソニック「…ん？」

テイルス「どうしたの？」

ソニック「もしかしてこれエッグマンの仕業じゃ…」

シルバー「え…」

ソニック「だつてカオスエメラルドまでこっちにあるんだぜ？それにカオスエメラルドなら大抵の事は可能だろ？」

テイルス「確かに…まだエッグマンが関係してるかわからないけど…」

リング「これからどうするんだ？」

テイルス「まずはカオスエメラルド探しかなソニックが拾ったならまだ何処かに落ちてるかも」

ソニック「なるほどなでもビ」にあるんだ？それにあんまり目立つ行動はできない」

シルバー「なんでだ？」

ソニック「リングを狙っているやつがいるからだ」

テイルス「え！？」

シルバー「なんだそれ！？」

ソニックはブラックの事を説明した

テイルス「何が何なんだかわからなくなってきたよ…」

リング「その時はその時だ、で…カオスエメラルドは何処にあるんだ？」

テイルス「えっと…」 探知機持つてる

テイルス「ここから東に行って…チック村にあるね、詳しい情報は連絡するよ」

ソニック「よし行くぜ！」

リング シルバー「ああ！」

こつしてソニック達はチック村に向かつのでした…

作りられた存在と世界（後書き）

勿論の事村の名前は私オリジナルです

チック村に向けて

ソニックとシルバーとリングはチック村に向かっている

ソニック「チック村はこっちでいいんだよな？」

リング「ああ平氣だ」

テイルス「ソニック！..応答して！」

ソニック「テイルスどうした？」

テイルス「カオスエメラルドはチック村の奥にある山の祭壇にある
よ！」

ソニック「OK！」

テイルス「気を付けてね！」

ピッ

ソニック「よし行くぜ！」

チック村

シルバー「ここがチック村か…」

リング「にぎやかな村だな…しかしあいづらも作られた存在か…」

シルバー「…」

リング「行くか…」

シルバー「ああ…」

ソニック「山の祭壇って言つてたな。」

ソニック達は今カオスエメラルドがあるらしい山のふもとに来ていた

リング「ならばカオスエメラルドがあるのは一番上の山頂だな

ソニック「どうと回収して戻るか

? ? ? 「やつまへいくかな?」

3人「! ?」

そこにいたのは

ソニック リング「ブラック! ?」

ブラック「よおあの時はよくも逃げてくれたな」

そつそこにいたのはブラックだった

ソーラー「どうして此処に？」

ブラック「ブラックスターズの情報網を舐めるなリングを狙つている以上場所は大体分かる」

シルバー「こいつがリングを狙つてるのか？」

ソーラー「ああそうだ」

ブラック「ブラック・クロウだ以後お見知りおきを…」

笑いながらシルバーを見るブラック

シルバー「なんでリングを狙つている？」

ブラック「教える必要がないだろ…」

リング「…お前この世界がどんな世界か知つていてるのか？」

ブラック「…どういう意味だ？」

リング「…お前は作られた存在なのか？」

ブラック「…」

リング「お前は一体…」

ブラック「うるさい…」にさわるやつめ…「

リング「…」

ブラック「兎に角もう逃がせない」覚悟しろ…」

ソニック「今は逃げるぞ…」

シルバー リング「ああ！」

ソニック達は山の中に逃げていった

ブラック「もう逃がせん…」

ブラックも山にはいつていった

こうして新たなおいかけっこが始まったソーック達は無事にブラックから逃げられるのでしょうか？

チック村に向けて（後書き）

ブラックのプロフィール
名前 ブラック・クロウ
性別 男
年齢 ?
性格 冷徹　冷静沈着

なんらかの理由でしつこくアーリングを追いかける　とある軍事企業ブラックスターの幹部　ほとんどの事が謎に包まれている

「山の奥のやり合」

山にはじつていったソニック達とブラック

ソニック「ここは別れた方がいいな」

シルバー「だな固まつてると見つかり安いからな」

ソニック「リングを一人にすると危ないからシルバーついてやってくれ」

リング「別にいいがソニックはどうあるんだ?」

ソニック「隙を見てあいつをやつける」

シルバー「危険だぞ!」

ソニック「何言つてんだ何も無い冒険なんてつまらないだろ」

シルバー「相変わらずだな」

リング「…頑張れよ」

ソーラー「お前にも『氣』を付けてやるよ」

シルバー「いや待て」

ソーラー「ん？」

シルバー「流石にお前と言えど危険だ俺にいい方法がある」

リング「どんなんだ？」

シルバー「…」

リング「いいんじゃないか？」

ソーラー「じゃあ行くぜー！」

ブラック「どうした？」

シルバー「行くぞ！」

リング「ああ」

ダッ！

二人は走り出した

ブラック「見つけたぞ！」

ブラックは持っていたマシンガンを撃つた

シルバー「このまま逃げるぞ！」

リング「ああ」

ブラック「ちつ…素早いな」

ソニック「ハアー！」

ドカッ！！

ブラック「グアー！」

ソニックがブラックの背中に思いきりスピンドルタックした

ソニック「どうだーー！」

ブラック「ちつー！」

ソニック「なかなか強いな

ブラック「貴様…」

ソニック「はあー！」

ソニーックはまたブラックにスピンドルアタックを繰り出した

ブラック「くつー！」

ブラックはギリギリの所で銃を盾にした

ブラック「死ね！」

ブラックは銃を撃つがソニーックはひらりとよける

ブラック「くつ…」

ソニーック「諦めたらどうだ？」「…」

ブラック「今日は俺に勝った褒美にリングは今は諦めるがいずれお前を倒してリングは捕らえる…そして…」

ブラックはそこまで言つと木と木をつたつて奥に消えていった

ソニック「何を言おうとしたんだ?」

シルバー「ソニック……」

リング「やつたか?」

ソニック「まあ攻撃は出来たが逃げられただけビリ回は諦めぬって
よ」

シルバー「じゃあまた来るのか?」

ソニック「あいつは絶対また来るぞコングを捕まえるまでは
ソニック「あいつは絶対また来るぞコングを捕まえるまでは

リング「…行くぞ」

ソニック シルバー「あー!」

無事にブラックを追い払ったソニック達ソニック達は山の山頂にあ

る祭壇のカオスエメラルドを取りに行くため足を進めた

「奥のやうな」（後書き）

バトルシーンが地味ですが、ご了承下さい。

祭壇のカオスエメラルド（前書き）

ソニックの動画見てたら更新遅れたあああ
…

祭壇のカオスエメラルド

ソニック「ここが祭壇か」

シルバー「あつ カオスエメラルド！！」

ソニック達はいま山の山頂にあるカオスエメラルドを見つけていた

リング「凄い場所にあるんだなカオスエメラルドって」

ソニック「…」
シルバー「…」

ある意味図星だカオスエメラルドは普段あり得ないような場所にいるのだから

ソニック「さあ回収だ」

ソニックがカオスエメラルドに手を伸ばし取ろうとするけど…

シユ

ソニック「What!？」

シルバー「んな！？」

リング「え！？」

なんとカオスエメラルドが消えた

ソニック「カオスエメラルドが消えた！？」

シルバー「何処に…」

リング「お、おい上を見ろ！」

ソニック シルバー「…？」

二人が上を見るとでかい飛行船があつた

ソニック「…エッグマンか？」

シルバー「いやちがう！」

リング「おそらくこの世界の者だらうな」

ソニック「あの飛行船のマークは…」

シルバー　リング「ブラックスターズか！？」

そう飛行船には黒い星が書かれていた

シルバー「じゃあ力オスエメラルドを奪つたのもブラックか！？」

リング「…」

リングが目を飛行船のハッチに向けると何者が上に登っているの

が見えた

リング「あいつは...?」

リングが目を凝らして見るとその者は羽はついてないしロープも使わずハツチに上がつて行くのが見えた

リング「あいつは上がつているんだ?」

更によく見ると…

リング「...?」

ハツチに上がつた瞬間姿が見えたが…

リング「あいつは...」

リングはハツチに上がつていったやつが…

リング「俺...?」

リングはあの影が自分のよつて見えたのだ

ソニック「クソッ！！」

飛行船は行ってしまった

シルバー「…ビリしたんだリング？」

リング「な……なんでもない」

ソニック「いつたんテイルスのいるクリスタル村に戻るか……話はそ
れからだ」

シルバー「そうだな行くか」

ソニック達は走り出すが…

ソニック「リングどうした?」

リング「…」

シルバー「どうしたんださっきから?」

ソニック「何があったのか?」

リング「いやなんでもない…行こうか

そう言いリングも走り出す

そしてソニック達はクリスタル村に向かっていった…

しかしあの影はいったい誰だったのだろう?

リングはずつと考えていた

あれは…自分?

自分は…

誰?
?

祭壇のカオスエメラルド（後書き）

明日から旅行だ八丈島から東京だーしかし更新はやめません なん
せ携帯なので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3750z/>

とある冒険～星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ～

2011年12月25日17時55分発行